

翻刻 「月の瀬遊記」 「大坂谷町川上橋少シ北へ入堀屋清兵衛と申者娘をふみ阿蘭陀人フルテルト云者の所へ行親元送り遣シ候文のうつし」

国立国会図書館関西館 日置将之

大阪府立大学学術情報センター 北川敬子

大阪府立中之島図書館 小笠原弘之・八木美恵

大阪府立中央図書館 苗村昌世 山田瑞穂 佐藤敏江

はじめに

一 月の瀬遊記

底本は大阪府立中之島図書館蔵（二三三・六／一五〇）一冊（十三・三×十九・二cm）表・裏表紙各一、本文十八丁 文久二年序 井上唯中等写、紀行文 本文は、著者（井上唯中）の文章に、韋（カ）樹が序文、補記（八丁表・十三丁）を加えている。著者については詳細は不明であるが、藻刈図で知られる森一鳳への旅の誘いかけが、和歌仕立てであるところから、一鳳に近い文化圏に属する人物であろうと推測される。



月の瀬遊記 序

本書は、月瀬への観梅の紀行文で、末尾に斎藤拙堂の著書「梅溪遊記」の抜き書きを付していることから、この観梅の旅が「梅溪遊記」に触発されたものである事を示しているが、誤字、脱文が多い事、収載されているのが拙堂の詩九編のみである事から、著者の手許にあったのは、写本かと思われるだけでなく、「梅溪遊記」が当時の風流人にとっていかに「魅力的な存在であり、広く親しまれていたか等、「梅溪遊記」の流布の様子も推測できる。

月瀬（現奈良市月瀬）は、紅花染の培染剤である烏梅を生産するための梅林であったが、江戸中期頃

から名勝地として名を知られる様になった。神沢貞幹（杜口）著「翁草」（安永五写）を始め、田宮仲宣著「橘庵漫筆（東牖子）」（享和三年刊）、韓聯玉著「月瀬梅花帖（遊月瀬記）」（文政八年跋）伴林光平著「月瀬紀行」（安政六年写）等文人墨客により、その景勝を愛でる詩文が編まれたが、月瀬が梅の名所として喧伝されるに力のあったのは、斎藤拙堂著「月瀬記勝」（嘉永四序）であった。その影響力の程は、同書が幕末から昭和にかけて繰り返し

出版された事からも窺える。

齋藤拙堂（寛政九年一七九七〜慶応元年一八六五）、名は正謙、字は有終、通称徳蔵、号拙堂・鉄研・拙翁、諡号は文靖先生。幕末の朱子学者。江戸津藩邸で生まれ、昌平校に入学、芝野栗山、尾藤二洲と共に寛政の三博士と称された古賀精里に学び精里門の逸材と称された。文政二年（一八一九）藩校有造館の学職に就き、弘化元年（一八四四）に藩校督学となる。藩主藤堂高猷の待講を務め、有造館に洋学所を設置し、種痘や洋式軍制を取り入れるなどの藩政改革にも関わった。交友範囲が広く、おもなところでは頼山陽、大塩平八郎、渡辺崋山、吉田松陰等が知られる。

文政十三（一八三〇）年二月十八日、拙堂は、門人の宮崎子達、その弟子淵及び山下直介を誘い津を出発、上野に寄り、服部文稼、深井士発、山本素仏、梁川星巖夫妻、福田半香を同伴、未の下刻（午後二時過ぎ）、同行十人（下僕四人総勢十四人）で月瀬目指して上野を出発した。この時の様子を、帰宅後九首からなる山水遊記にまとめ、大納言日野資愛に題詩を乞い、頼山陽が添削を施し「梅谿遊記」と題した。写本・稿本のまま拙堂周辺の人々に広がったものと思われるが、その後、月瀬の観梅に同道した宮崎子達（青谷）が拙堂の依頼により挿図を付す等し、嘉永年間に出版された「月瀬記勝」に乾冊として納められた。



「月瀬 嵩尾山長引梅溪真景之図」松川半山画 暁晴翁文
安政五年大坂 柳原喜兵衛、鹿田静七、和州鍛冶屋兵蔵刊

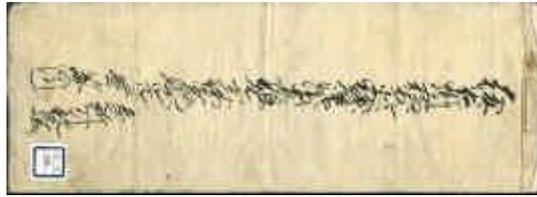


梅溪遊記 序

二 「大坂谷町川上橋少シ北へ入堀屋清兵衛と申者娘をふみ阿蘭陀人フルテルト云者の所へ行親元送り遣シ候文のうつし」

原本は中之島図書館所蔵(文書／二四四) 天保十三年写、一冊(三八・五×十四cm) 表・裏表紙各一枚 本文四丁

大坂で奉公後、長崎丸山へ住み替え、阿蘭陀人と結婚、日本を抜け出し阿蘭陀で暮らしている女性が、谷町在住の親元あてに送ったとされる手紙の写し。事の真偽は不明であり、内容にも矛盾があるが、鎖国下の日本で、いわゆる南蛮・南蛮文化が、庶民にどの様に認識されていたかの一端が窺える資料となっている。



表紙



第一丁 (表)



第四丁 (裏)

凡例

本書は底本の忠実な翻刻を原則としたが、通読の便を考慮して、一部漢詩を除き、返り点、句読点を施した。

反復記号「ヽ」「ヾ」「ヿ」「〰」は底本のままで表記した。

異体字については標準の字体に改めた。

本文における朱字はそのまま朱字とした。

張り紙訂正のある部分は、□でかこみ、そのしたに()で訂正まえの文章を付した。

筆者が二名の場合、字体を変えて表記した。

判読できなかった文字は□で表記、判断に迷った場合は文字のしたにカを付した。

活字のない文字は□にルビで表記し、()内に漢字の説明を付した。

参考資料

- 日本芸林叢書 第二卷 池田四郎治郎等編 六合館 昭和三年刊(〇三二／六三)
江戸後期月瀨觀梅漢詩文の研究 村田栄三郎著 汲古書院 平成十四年刊
(九一九・五／六三N)
月瀨幻影―近代日本風景批評史 大室幹雄著 中央公論社 平成十四年刊
(九一九・五／五六N)
国書総目録 岩波書店 平成二、三年刊(〇二五・一／一N)
月瀨記勝 斎藤正謙著 看雲亭藏板 嘉永四年序跋 二冊(二三五・六／九〇)
月瀨記勝 斎藤正謙著 看雲亭藏板 二冊(二三五・六／九〇)
月瀨記勝 斎藤正謙著 大阪 豊住幾之助 明治十四年刊 二冊(二三五・六／九〇)
月瀨記勝 斎藤正謙著 大阪 豊住幾之助 明治十四年刊 二冊(朝日二三五・六／三)
月瀨記勝 斎藤正謙著 写 一冊(石崎三七二／五)
月瀨記勝 斎藤正謙著 大阪 雙玉書樓 図版一〇 明治十二年 二冊(子二七四)
月瀨富尾山長引梅溪真景之図 松川半山画 暁晴翁文 安政五年 大坂 柳原喜兵衛
鹿田静七 和州 鍛冶屋兵藏刊(枚七七)

『月の瀨遊記』

月の瀨遊記

難波津にさくや木の花の香は、いにしへになるともいと高津の宮に、千早振神のみ末のたへぬよ代ニ、月の瀨梅よ、みよしの、花よ、いつれも近く見む御代そ猶ありかたかりけれ。しかあれは、中昔人のいひいたせたる梅の名所といふ月の瀨なむ、其王斜の道行人のしれかぬを、こたひ掬水舎のあるし井上唯中くわしくも見ぬ人のためにや。みしかくも文にころさし長く書しるされたるもの成。されはことの葉のたりぬるもむへなり。なから山鳥の尾山の盛菅の根長行の花のまにマによみいたされしうたともよりしらぬ物さへおもしろめきて、はなに打むかふこちして、此はしきをかきしるし侍るも親しきゆかりならさらむやといふ。

文久二とせのきさらきけふ

韋(カ)樹

月の瀬遊記 里程略 (貼紙訂正)

角の堂 京はし纏凡二里半余

ナカカイト
中垣内 角の堂纏麓迄十二 三丁

麓より八丁程登ルハコヲト 酒煮染そはあり 大文字屋

追分 大文字屋より少し登ル 右手 右奈良道 左木津道

田原 大文字屋より一里半 **峠には休所なし 此所駄荷立場あり**

高山 田原より一里半 **此所より木津迄めしなし** 商人宿 高山権兵衛

鹿の畑 高山より十八丁 商人宿 車屋久右衛門

ざくろ 鹿の畑より十八丁 休所なし

山田 さくろより十八丁 右同断

はぜ 山田より十八丁 此所は村へはいらず はせ村の前を通り行

木津 はせより十丁余 **支度所宿自由也** 宿 川口屋喜介

戻りには舟あり 淀迄下り 朝五ツ時出舟 昼後出舟

渡し場を左ニ見て、堤つたひに川**つたひを** (添を) に貼紙訂正) 廿丁斗ニ而暫野道を行。

又川はたに出、左二川を見て右手は山根をつたひ暫行。加茂の社の森の下を通りぬけて、左手に藪を見て堤を行。七八丁にして人家の見へる所加茂村也。

加茂 木津より五十丁 伊賀ニ通ふ商人宿 豆腐屋平三郎

笠置但シ北笠置なり 加茂より五十丁 **加茂より此所迄打の峠あり。此山下りてより左は**

山根、右は清流にて至而勝景なり。此川つたひ廿丁計にて笠置ニいたる 宿 木屋勘兵衛

此所宿にて酒肴自由也。こゝにて必道案内人を雇へし。笠置名所名石案内なくてはしり

かたし。月の瀬の近道いつる所までつれ行て雇賃◎百弍十四文也。此北笠置より又南笠置へ行川渡し有。舟賃八文なり。山の頂上迄八丁のほる。うら道江行は柳生へ出ルに近道あり。

鹿路 ロッロ (鷺) に貼紙訂正) 山 サン 笠置寺見物所略

至而ものさびたる一寺あれとも湯茶の用弁なりかたし

一古鐘樓あり 尾上の鐘ニ似たり

此鐘の響黄鐘調ニ能叶ふといふことは、昔より云傳へる也。あるとき郡山の領主の命に

よりにて南都舞の折から伶人のかえるさをこゝにとゝめて、音律（樂）のしらへをおゝせ有てやゝしらへられしに、鐘たかはす響律と合奏すること奇々妙々なり。所謂流泉啄木をよくしらへ引ときは、必天人下るといふもこれらのたくひか。左に圖之如く銘あれども、古蝕錆時代臨銘見へかたし。鐘のこくちに年号の銘斗写置ぬ。併此鐘は解脱上人冥土より閻浮檀金を取帰り、是をまじへて鑄立し鐘也。此鐘を一度聞し輩は三惡道の罪を減と聞

鐘銘

建久七年丙辰八月十五日

大和南□（角カ）亢阿弥佛と有

此正月堂ト號スはいにしへは護摩堂也。春三ヶ月の間、天下安全の修方在て、二月堂三月堂は當山回祿の後は南都東大寺ニ於て修行在也。

一 一字の小堂山上にあり 堂前に大石有

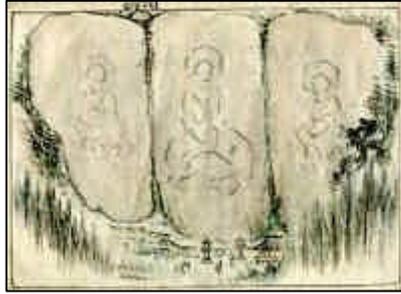
一名正月堂といふ（書損じに張紙）

弥勒 大石 高サ 二十間余

文殊 幅 七八間

薬師 各佛像を刻、薬師の岩は舟の形なりしに近頃打破候よし

石きおさか



一 貝吹巖 良弁僧都護摩修方の時ほらの音せしと也

一 太鼓巖

一 手鞠巖



- 一 胎内くゞり巖 奥の深サ二十間斗りニ而身をちゞめてくゞるなり
- 一 笠置石 天武天皇此山開キ給ひし時、此巖へ登り給ひ着御の藺笠ヲこゝに遺シ還幸し給ひ、遂に佛閣を建立在りてより笠置寺と號ス
- 一 駒繫岩 天武天皇遊獵し給ひし時乘し給ひし駿馬崖に膝を屈して動かす。天皇危急にして三宝を禮し安泰を得さしめ

給はゞ此山に佛閣を造営すへしと祈誓し給ふ。既感應ありて乗馬速に進む。則走馬留し岩是なり

- 一 虚空蔵石 高サ十丈余 幅五六丈 石面に佛像詳なり
- 一 胎蔵界 此石不動明王と申事 佛像見へかたし

(右の外大石数々有。後醍醐帝居所、御殿、柱立穴、大石毎二有。此岩の上ニ而楠公軍配 東北に當而

臨見るに、木津川の上ニ而諸所村落、伊賀街道遠くは山城迄も眺望至て勝景なり」に紙訂正)

笠置山地震ニて大痛、大石の内胎内くゞり岩屋谷間へ落、其余別条はなけれど遂にすれ落たる所ありて甚危ふし

- 一 般若臺 鐘樓の西にあり。解脱上人と春日明神と対面の所也
 - 一 千手窟 良弁僧都こゝに籠りて行方し給ふ所なり
 - 一 護摩檀跡 良弁僧都此所にて祈禱有之也
 - 一 榎本神 當山の鎮守也
 - 一 楠公畫判石 楠正成石面に書判居置給ふ石なり
 - 一 笠置皇居 元弘元年九月、後醍醐天皇笠置山に籠り給ふ所也。弥勒石の上にあり。薬師の傍より登る。本丸二の丸と号南北に双ぶ。其間に溝の跡あり。北の方弥勒石の嶺に至つて地形たいらかなり。此所に御殿跡柱立の穴岩毎に有
- 増鏡云、後醍醐帝笠置におはしましける頃秋ふかくなりて
- うかりける身を秋風のさそはれて思はぬ山乃もみしをぞみる 主上
- 一石不動 山の嶺にあり 鳥仏師の作也 高サ三尺斗り

此所甚勝系也。麓には泉川を帯て白波巖を碎く勢ありて、水流の委曲驚蛇に似たり。山第一の勝地にして千巖秀を競ひ萬壑流を争ふたる山水の美といゝつへし

太平記云、笠置の城と申は山高ふして一片の白雲峯をうづみ、谷深ふして万仞の青巖道を

さへぎる。つゝらおりなる道を廻りてあかる事十八丁、岩を切て堀とし、石をたゞ見て
屏とせり。さればたとひ防アセキき戦ふ者なくともたやすくのほる事得かたし

陶山小見山夜討道

笠置の後山也。此所巖石峭壁シヨウキヤとして禽獸キンジュウも翔かたぐ、麓には泉川めぐりて青羅アヲを帯るに
似たり。

太平記云、其夜は九月晦日の事なれば、目さす共しらぬくらき夜に、雨風はけしく吹て面
を向へきやうもなかりけるに、五十余人の者共太刀をせなかにをひ、刃をうしろにさし
て、城の北に當りたる巖の数百丈そひへて鳥もかけりかたき所より上りける。二町はか
りはとかくして上りつ。其上に一段高き所あり。屏風を立たる如くなる岩石かさなりて、
古松枝をたれ蒼苔露ソウタイソユなめらかなり。こゝに至て人皆いかにもすへきやうなくして、遙
に見上ケて立たりける所、陶山藤三岩の上をさら／＼とはしり上りて、件のさしなはを
上なる木の枝に打かけて、岩の上よりおろしたるに跡なる兵どもおの／＼是に取付きて、
第一の難所をやす／＼と皆のほりてけり。下略

諺云、笠置の川上に飛鳥路アスカジといふ村あり。此所の土民等陶山小見山が案内者となり後醍醐
帝をくるしめける遺恨により、今に至りて笠置村と不和にして、柴薪の交易、縁くみな
とかく禁しける。是其頃いふころよりの風俗なりとぞ。

後醍醐帝、其夜悪人の為に笠置山をにけ給ふに、三日三夜間山奥へ入給ひ、供御さへ持
者もなく御草臥出させけるに、其山の岩に御もたれ、後醍醐帝、其夜悪人の為に笠置山
をにけ給ふに、三日三夜間山奥へ入給ひ、供御さへ持者もなく御草臥出させけるに、其
山の岩に御もたれ、暫御やすらはせ給ひし御時御ねむり有しに、上なる松の露御袖ニ落
し時

御製

さして行く笠置の山をいてしより天か下にはかくれかもなし

藤房卿 皇を守護し深山之奥迄御友いたしおはせしに 藤房卿

いかにせんたのむかけとて立よれば猶そてぬらす松の下露

是より西南に柳生への裏道あり。案内者ニ能々聞て下るべし。山下ニ小流あり。是をつた
ひ行は柳生より笠置ニ通ふ廣道あり。是を凡六七丁斗ニ而柳生ニ至る。此所より月の瀬迄
の道知レにくし。此所ニ休息所あり。是ニ而能聞へし。弁当の用意すへし。仕度所更にな
し。

柳生 笠置より二十丁

奥か原 柳生より十五丁

高尾 奥か原より一里

桃か野 高尾より十丁

高尾より此所迄、此所より月の瀬迄各々梅林所々多し

月の瀬 桃か野より一里に近し 宿 鍛冶屋といふ。鍛冶職にて花の頃は宿するよし

此宅新建にて至而よし。席上より坐して居ながら、谷川の流れを真向ふて臨は、左右谷々梅林一目に望。小舟の遊人舟渡しなど晝中の趣あり。此所より尾山江はひとたひ河原に下り、其坂道すへて梅林にて、樹下をくゞり歩行事式三丁にして、河原つたひに七八丁にして舟渡しを越、しはらく川つたひを（「添を」に貼紙訂正）行。左手二山道あり。是則尾山の麓なり。坂の半にて見かへれば谷間二数千樹の梅花あり。又月の瀬の人家又晝中の如し。

舟渡女にて、竹棹を以さしあつかふ事男子よりも巧者なり。人毎二花見かと問ふ。花見なれば、酒手を呉といふ。餘は無銭にて渡と見ゆ。三人二而は銭とらせは、おしいたゝきたるは、いかにもやさし。

此所二而一宿

尾山 月の瀬より一里には近し 宿 梅屋嘉蔵

此宅常は濃家にて、花の頃のみ宿するよしにて、宿屋めき申もたる風情なくて、至てしつほく也。されとも花の盛には、伊賀の上野より、藩士、

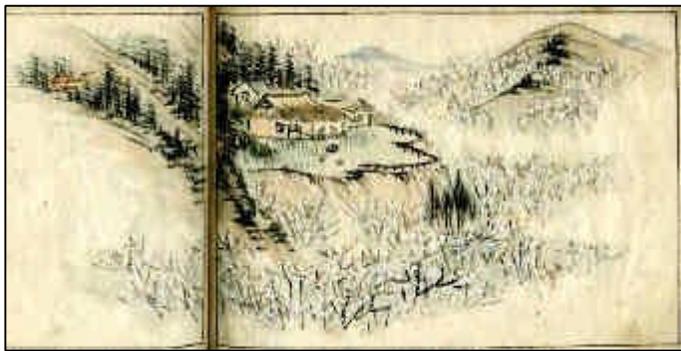
あるは町家の人々、男女打群来り。そこからこの岳阜に敷物などし、宴を催し、うたひ舞もあり。いつも酒肴を籠に荷なはせてくる。夕刻にいたればおもひくゝに立かえる。初更におよへは真に幽清の山家となる。

此所酒肴は何れ携きたらすはなにもなし。芋汁麦飯のみ常にあるよし。扱十六日夜なるに、月いてければ用意の弁當取出し、酒は兼而北笠置の山下に、大和屋治郎左衛門といふ銘酒やにて求し樽をこゝにてひらく。夜も深更に及ほと猶おもしろし

春もや、けしきと、のふ月の梅 翁

夜ふけ行ま、にこの句をおもひいて、月の梅を見て

あなをれは猶おもしろし梅のかけ 唯中



梅屋 戸口ニ並ひて湯殿あり。風呂の中より谷間の梅の梢に月さしたるはおかし。風来

ぬれは湯も匂ふと思はる

○ のこりなく梅咲匂ふ山さとはけむりも水も花のかそする

右秀満といふ人の詠を思ひ **いたせしに** (「出られる」に貼紙訂正)

○ 鶯のやとはしらかはふるめきてとまりかへなん尾山月の瀬 **廣孝** (「廣愚吟」に貼紙訂正)

訂正)

十七日 快晴 暁二起出谷間の梅花薫し英するは何ニたとへん方もなし。溪香満ちたり

○ 高々下々梅千樹
在家其中不知香

(同文に貼紙上書き)

○ 此里は梅の林にこめられてかほるものとは知らて住けり

右は熊岳師之詩、翁歌の意なるを思ひ出て、けにもと感しぬ

亭主谷々の名所をも案内せんといひけれども、あしの草臥ありければ、先まちかき所搜^{くぼ}、祝谷を初、八谷見物してやと二帰り、月下の梅林を打なかめて更行迄亭主とかたりぬ。此梅屋の秘方梅仙丹と申梅にくを求て、一寸腹し見るに何とも雅味多し。酒後に甚よし。効

能略之。

此所に一泊、月の瀬に一宿いたし、諸々勝景に終日遊は、たくひなき楽しみなるへし。日を限る身はまかせかたく、又乃時をと思ひのこれり。

梅林八谷

初谷 敞谷 第二 鹿飛

第三 搜^{くぼ} 第四 祝谷

第五 菖蒲谷 第六 杉谷

第七 一目千本 第八 大谷

十八日 快晴 尾山を立出て帰路長引に梅林**ふか**し (探に貼紙訂正)

長引 尾山より八丁 梅樹多くあれとも勝景なし

田山 長引より一里 此間二船渡し有 サ々セといふ 此所を少し過て伊賀街道北笠置

へつゝく

大河原^{ヲガラ} 田山より一里

有市^{アゲ} 大河原より廿七丁

北笠置 有市より廿丁 宿支度所自由也

此所木津迄乗合船有 朝五ツ時 昼時 両度

木津泊なれば昼後の舟に乗へし 朝舟にのれば木津へ昼時二付よし それより淀へ乗合有よし

十丁斗川下、南笠置への舟渡しあり

木津江戻には、此渡し不渡 川つたひ四十丁斗川下○出洲といふ所渡し有。是を渡れば加茂村の堤に出ル 是を戻れば加茂迄の山坂なくて大ニあゆみよし

加茂 北笠置より五十五丁 此加茂堤より南を望は春日山みゆる 此所より南都江のわかれ道あり。近道木津へ出ルに不_レ及

別道里数程略

南都より春日山の東南にかゝりて道あり。たき坂といふ處より始めとす。此前名所あり

石切峠須山トモ云 春日より五十丁

沓かけ 石切より半里

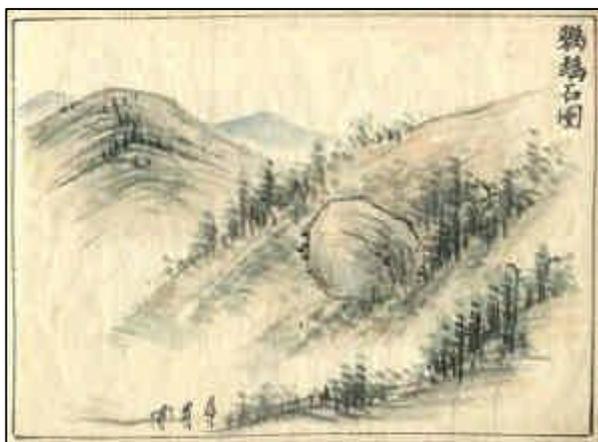
水間峠 ミマ 沓かけより一里

大橋 水間より一里 此所休息所あり。其余月の瀬迄休所仕度所更になし

北野 大橋より一里

鸚鵡石図

北野より月の瀬迄の間に山路あり。右手は谷、左は山根を通る道に、谷の向ふに大石あり。此石鸚鵡石といふ。此石の向ふに真向てもものいわく、其通りを此石より答へていふ。至而あさやかに答ふる事、石の中に人かくれ居てまねするかと思ふと、奇々妙々なり。



月の瀬 北野より五十丁

南都清水より東江、福井町より春日山の南手をこゆる。瀧坂といふ。石切峠まで五十丁の間、半は道屈曲にして、溪流れを左右にし、巖石路上に積り、溪流瀧をなす所あまたあ

りて、実に勝景、紅葉の頃はさそかしと覚ゆる。登り果ぬれば石打村なり。水間大橋より日々炭薪を出す。牛馬路驛多り

○南都纏月の瀬迄凡六里余

此辺訳て勝景にあらず。田舎山道なり。大橋村より五十丁にて北野村なり。村中五六丁有へし。村はつれより十丁斗りにて、道兩破○右イカ 左月ノセ 伊賀道にて廣し。月の瀬へも此道より午籠にて行は半里程遠し。左に山江かゝりて峰通りを行は、一里余にて月の瀬より少々前にて、右の廣道と出會、大橋より月の瀬江二里といふ。山通り人家一軒もなし。大橋より案内者賃錢式百五拾文也。此道中は伊勢江の間道にて、大橋より五里にして青山越、新田に出ル。村々に老軒宛茶屋ありて宿もするなり。○水間二而中飯いたすせつ飲食至而飽也。但しこんにやく玉のめし也。甚饒味也。併農家故質朴二而風情面白し。其内ニも沓掛の茶屋は、豆腐、菜、油揚、干カマスゴ之類也。沓文菓子も有之。

月の瀬尾山にてよみいたしま、

かをふみて分入梅の山路かな 唯中

数千樹の梅の香ぞ立あさほらけ 廣孝

初驚いてたちのみきり森一鳳翁をともしなひてとおもふに、先生たしありて

月の瀬の梅さそはれてなみたかな

とよまれしもこにて

見ぬ人のためとこそすれ初袖は散ぬる梅の香のしもしより

このみやけとてなんにもなし。梅のさかりのはやかにりしを見て

月の瀬の梅見のこすはみやけなり 唯中

月瀬梅図

月の瀬尾山、此所にてはむかしより梅のさかり彼岸の中と申なれとも、都の梅の頃のはやき、をそきにか、はらす、ひかむすくれはかならず満花なる物也



伊勢拙堂先生述梅溪遊記

何地無梅何鄉無山水唯和州梅溪

花挾山水而奇山水得花麗為天下

絕勝然地在別之東諏頗幽（石の右に辟^{へき} 僻^{へき}カ）旧罕
造觀者名不甚顯々自我伊人始云

溪傍種梅為業者凡百十村属伊州

在我上野城南三里許我藩封強除

伊半勢外又有和之田五万石環梅

溪而處而種梅之村多属他封獨和

之廣瀨嵩村伊之白檜治田為我治

下而已然梅舊志月瀨諸村多属伊

伊人云戰國之際豪強在奪此地始

属和今審其地勢近上野城山脈相

通理固應然故和人之來常少而四

五十年来伊人每常往觀焉溪之勝

於是乎顯乎十村之梅不知幾万株

然晝臨谿除溪最清絕溪發源

於和州之宇田慰伊之名張而到

於此廣殆百步尾山在北岸嵩

月瀨桃野在其南岸危峰層巖

簷々錯立其間梅為之經而松為之

緯水竹点綴之余往津城距梅

溪殆二日程久願遊而未能也。庚寅

二月十八日與宮崎如伊州遂往遊

焉末乍城門往一里余為白檜山谷

間已多梅花漸入佳境又半里獨為

石打又行末一里尾山在目躍然至

則遍地皆花余初恐違花期見之

心降入憩三學院約宿而出往觀一

目千本梅溪之賞始於是矣

記二

一目千本尾山八谷之一也花最饒
故有此名蓋比芳野桜谷云余與
同人出院下前岸覓山水與梅花
皆已佳綴（任意而行至一大谷文
稼諫（識）而言之徑詰曲而上花夾之
步出其間如繭白雲而行數百步
達山顛下顧滿望皜然與溪山相
輝映余嘗遊芳野觀其一目千本
有此盛而無此勝又嘗觀嵐山桜
花有勝而無此盛也更求之西土以
梅花名者杭之孤山境蓋幽花則
寥寥蘇之鄧尉花頗多地則熱鬧
唯浮梅花村封峻峰臨寒溪而花
尤饒庶幾可比梅溪坎曰已斂昏花
隱淡煙中千樹依約不見其所極
暗香蒨勃人聞溪聲益近且大
至咫尺不弁色而後去

記三

昏黑還入院欲俟月復出觀花也余平
生想溪梅月夜之奇欲一遊併之每歲
來春有人自伊來者輒詢之花開謝與
月之□盈每齟齬不相合遲之七八年置
今歲欲以今月望前來然以地在山中
著花殊晚其盛開常有春分前數日而
春分在今月未如其月何忽思卻康葑詩
云看花切莫見離披私謂及半間則可
何待其蘭漫遂以望後三日來豈意開已
七八分或將十分實望外之喜也獨奈日已
落黑雲覆天意殊悵々張燭欲飲此行

購樽容五升者滿貯酒命奴負荷呼
取之酌不數巡而竭怪詰之のち奴醉墜地
致傾覆益悵恨買村酒得數升來洗盞
更酌雖甜不適口亦自醺然文家風流士
公圖以詩名海內而半香善

記四

花月之賞已畢還就宿夜已上更疲
甚一睡到曉覺則奇寒沁骨紙牕
甚白起推戶見積雪平地四寸連呼
奇又呼酒滿引大釭子同人出復赴
真福寺到昨夜翫月處雖溪山
不異丹崖碧巖悉化為白玉堆花
亦如素彩如粉傳何郎之而其美
更增一俯一仰入目皚然獨溪光益碧
作標玉色耳煤溪之清於是焉極矣
古人論梅謂讓雪三分白然雪以白
勝梅以艷勝各有佳趣韓退子之詠
雪梅云彩艷不相因（同カ）是可為定論已
此行既収花月之奇今又并雪梅之
清天之賜我何厚也欲往覽前路
之以步履艱而止

記五

既而天明日出近午雪盡消乃欲往
南岸之勝行到一目千本下見舟橫
南岸即嵩村渡也隔水呼之老篙夫
一聲應答自叢竹中出撐舟來載
余謂衆曰北岸山路崎嶇難行未能
悉其勝請先觀之而後及南如何衆曰
可矣乃命泝溪抵真福寺下崑石斷
齧齧舟乃尾山之梅以谷量八谷各數

百千樹真福在其極西其下為初谷曰
敞谷第二日鹿飛第三日搜くぼ□其上在
天狗巖謂羽客所棲止第四祝谷第五
菖蒲谷第六日杉谷第七日即一目千
本第八日大谷花之多與一目千本相頡
頤相距皆不過數十步其勝各異
不能盡狀唯諸谷之花與前崖之山夾
谿相映舟行其間香然覺仙路不遠
此尤為奇也公圖嘗遊於此在句云梅
花亦自有僊源者竟不若梅溪之得
仙趣彼彭沢之記徒費力耳恨不使目
擊如此之勝也公圖首肯者久之

記六

舟中既覽尾山諸谷又欲西觀桃野纔
轉棹則北岸所未見之山突兀躍出
樹石雜焉虯龍虎豹譎詭夭矯有一石如
人之冠而立曰烏帽子巖水益駛激搏
硯い□（礪の下に土）稍緩處俯而窺之澄澈見底遊
魚可數花片点波輒就啜之無所得而遊
為之一笑仰見桃野在前地勢とつ□（下の右に走）絕
黃茅數家縹渺現出於梅花爛漫間
如瑤宮瑤闕在白雲中可望而不可
即也篙夫云此溪每夏月躑躅花
開水變作猩血亦為奇絕故名躑躅
川也嗚呼此溪之奇一何多也
恨一時不併觀記之以俟他日

記七

還抵嵩村舍舟上岸綠竹數畝藍水
亦梅溪中不可少者也西麓梅花亦多
与月瀨之花相連爛成銀海西行數

百步花間得坂螺施而上寔為月瀨
山腹香雪中出大石苔鮮被之蒼
鬱可愛踞而少歇益上至巔眼界豁
然溪山里露無得藏匿花溢山填壑
彌望皜然譬如登泰山頂下瞰大地皆
白雲是得梅溪之全真也宜乎月瀨
之名獨顯不止其名雅馴也適天復
陰雪大至風薄之如舞蝶塞亦奇觀
溪索渡還

記八

天復晴過杉谷尾山第六谷也岡阜陂
陀得徑而上俯見花堆積谷中為殘雪
土人為導者曰雪若不消花蕊凍瘴（カ）
獲實不饒幸消沢盡今年必豐矣余因
詳問一歲之入曰尾山一村熟渴乾梅二百
馱每馱一斛伍斗重陌斤併此間十餘
村中熟大抵得千百馱每馱價銀玖
什錢或陌錢云盖地既墮掬不可
耕以此當穀及實熟採乾送京都
染肆獲錢不減萬石之入亦山中徑
濟也聞備後三原有大梅林未知與
如何公圖曰吾遊三原者再為地平
遠与此間異趣花之饒或可相頡
頑地之勝則不及遠矣愈上則一
目千本見於左又前望南岸之花
不減月瀨之觀適斜日□（貝の右に矢
射カ）之花光
煥發芳霧噴山谷殆使人目眩
不能正視亦一奇也

記九

樂哉梅溪之遊也兩日留連從良友佳

朋覽天下無双之勝天亦不靳其

雪月之美并賜之以成三絶可不謂

多幸邪日夕辞院初更達上野客

舍此行余得七言律詩十首實（カ）於

奚囊与公圖贈篇及文稼半香等

所作詩若畫裊載而帰貼之壁間

又瓶挿院主所餉梅花有几案之側清

香満室數日悅然猶在梅溪中矣於

是追記之九篇使子達造圖置各篇

左以未遊者亦欲此溪之益顯也

文政庚寅仲春

伊勢拙堂居士齋藤謙

『大坂谷町川上橋少シ北へ入掘屋清兵衛と申者娘をふみ阿蘭陀人フルテルと云者の所へ行親元送り遣し候文のうつし』

大坂谷町川上橋少シ北へ入掘屋清兵衛と申者の娘、名はふみと言る女、大坂松重と申茶屋へ年季奉公ニ遣置候處、をふみ義文政三年三月廿七日長崎丸山へ住替ニ相成。夫纏阿蘭陀人屋敷へ折々参り、阿蘭陀名にてフルテルと申ものゝ女房ニ相成。十六年めにて親元へ送り遣シ候文のうつし。

あまりなつかしさのまゝ文して申上断候。私事、ふとした縁にて阿蘭陀人のフルテルと申御方ニ二世の契約いたし、文政八年九月廿二日、長崎纏舟へのせられ、しのはせやうぬき出し、日本の地をはなれ北海へ廻り上の沖参る所に、母殿の御事思ひ出し昼夜ともなきあかし、七日ふりにていその西南に見る松の間に、富士山と承拝し候得は、ものもいわす。富士は日本の見納かと存候得共、おんなこりおしく、限りなふ母殿をてふ事なつかしと、なみた袖をしほりて居内に日も暮シ。その夜大風吹出し申候而、廿日斗昼夜西南にはしり、少々風もやみ候まゝ舟のやくらと申所ニあかり、四方を見渡候得は、東南に島壱つ御座候。夫ヲ尋候得は、キリスと云て日本纏四百斗はなれたる島ニ申候。此所へ舟を留、明方又々

風吹おこり、唐の地北海とか申所、舟の走る事三拾り斗にて、漸々やみをだやかに相成。
その所ニ而阿蘭陀と申處何ほと有と尋候得は、凡式千里斗のよし、我身の多ん無と中々見
へ不_レ申候との事故、弥ふるさとの事わすれかたく、我身の多ん無とは申なから、不孝のつ
みのかれかたく、なつかしきせんかたなく、昼夜ともなきあかし、その内に正月十三日と
申に、天笠のイハエと申所ニ阿蘭陀の舟問屋御座候て、シキアと申所ニ久々逗留いたし候
得は、その所人々めつらしき人日本より参り候と、五里七里又は拾里式十里先纏私を見物
に参。夫纏又々舟に帆をかけ、五月朔日漸々阿蘭陀のケイケルと申處着、私夫國に着致し
(候カ)。

フルテルと申家の名字ニ御座候而、その名はフルテルユウトと申候。その家ニ母と妹老入御
座候。日本にて申候得は、庄屋の頭とも申ほとの家柄にて、下人もあまたつかひ、何にふ
そくなふくらし、喰物は牛ふたのやうなるものを常にたへ申候。穀は少も無_二御座_一候。去
なから、私ニハ日本のものとして、天笠より米取寄せ食しけれ候ま、少しもなんきはいた
し不_レ申候得共、日本事斗おもひ出し候ま、爰元妹きのとくかり、かこひの内を五拾坪田
地をつふし、日本の町家のやうこしらへ、その上母殿やおてうの姿を木さふにきざまし、
日本に居候時のまね事にして日々酒宴もやうし、いろいろとなくよみくれ候ま、ふじや
うは少しも無_二御座_一候。家内もむつましくらし居候内に、男子出生いたし、當年七才ニ
相成申候。名はハイリキンと、日本の咄しいたし候得は、シヤイモテナギと申候。此言は
はあいたいと申事ニ御座候。日本の昼七ツ時分は此方の夜明方ニあたり申候承り、夜明ニ
相成候得は、シヤイモテインエと東南に向ひ候て、母殿やおてふにおんに懸度となきく
らし、長崎の友達へも文を遣シ度候得共六ケ布、母さまへ内々文あけ度と存くらし候得共、
此地にて格別ねんころなる人に無_二御座_一候ては、一筆の頼もむつかしと、又長崎ニ而も通
辞人へまひなひ致なと頼まねはと、私事もなんきニ相成申。此方の夫も立行かたく相成候
事に御座候て、参る事も六ケ敷おそろしく、御事のよし承り、夫よひ久々文もあけ不_レ申。
此度、ふとした便り神佛の御蔭ニ而届被_レ下はいのり居。又々めつらしき物はたくさんにさ
シ上度候得共、文よりは品物事の外六ケ敷、万一あらはれ候得ば濟不_レ申候よし、文改ニ相
成候ても、かよふのこさひ申訳わかりさひすれば、かく別の事に相成不_レ申候よし、わたく
しのかみをきり取さし上候ま、私と思召も御座得ば、其地にて唐物、らん物、薬種など、
紅毛ニかた取あつかひ候。御見たて、長崎にて通辞人へ厚く御たのみ被_レ下候得は相届申候。
此方の名はモウヤテルユウト申候御事のよしと御座候。実にく不孝の段幾重にも、過世
の多んねんとおんあきらめ御免るし被_レ下候様、ねかへあけ断候。妹おてうを私と思召、を

てふは私になりかわり、はは殿へ孝行致くれ候様、頼入申候。申上度事は山々候得共、筆ニもつくしかたく涙にくれ、あとや先のみ申上断候。よく／＼御すひ覽可_レ被_レ下候。めてたく かしこ

大坂 御母殿

阿蘭陀ニ ふみ

阿蘭陀と言所は大坂纏一万三千里有なり

天保十三寅十二月寫_レ之

□□(尔人カ) 村之内 若□(揚カ) 分

田中荘兵衛印

終わりに

中之島図書館所蔵の古典籍、大阪に関する資料の中には、既に翻刻・紹介されているものもあるが、所蔵する資料、特に写本に関しては紹介されていないものが多い。そこで、職員の知識や技術の習得を目指すと共に、より多くの方々に中之島図書館所蔵の大阪に関する資料を解り易い形で紹介する目的で翻刻に臨んだ。特に「月の瀬遊記」については、十年近く前、古書店からの購入直後に閲覧希望があったが、受入作業中にご希望に添えなかつた経緯もあり、今回翻刻という形で紹介させて頂くこととした。

尚、本書は広く一般に公開しており、閲覧・複写が可能な事を申し添えておく(佐藤記)。